オーストラリア長老派教会
朝鮮ミッションと女子教育

朴　　宣　美

オーストラリア長老派教会朝鮮ミッションと女子教育

朴　　宣美

はじめに

オーストラリア・ヴィクトリア長老派教会（the Presbyterian Church of Victoria, Australia、通称、オーストラリア長老派教会、以下 PCV と略す）は、1889 年にデイビース牧師（Rev. J. H. Davies）を朝鮮へ派遣し、1891 年に釜山でオーストラリア長老派教会朝鮮ミッション（Australian Presbyterian Mission in Korea、以下、APMK と略す）を開いた。APMK の宣教師たちは、PCV 傘下の青年連合会（Young Men's Fellowship Union、1884 年に結成、以下 YMFU と略す）やヴィクトリア長老派教会女性宣教連合会（Presbyterian Women's Missionary Union of Victoria、1890 年に結成、以下 PWMU と略す）より派遣され、朝鮮の慶尚南道で宣教活動を展開した。

PCV は、他のプロテスタント教派とは異なり、日本に宣教師を派遣しなかったため、日本における宣教師関係およびミッションスクール関係の研究の中で取り上げられることはあまりなかった。オーストラリアをはじめ欧米では、1970 年、オーストラリア長老派教会宣教局（Australian Presbyterian Board of Mission）より、朝鮮宣教の歴史をまとめた『オーストラリア長老派教会朝鮮ミッション、1889–1941』が出された[1]。そのあと、1991 年に PWMU の 100 年史として、『多くの女性がいた―祈り、活動、資金が一つになった 100 年の奉仕、1890–1990』が出されたが[2]、以後、APMK に関する研究は続かず、立ち遅れていた。しかし、近年、ジェンダー史や教育史の視点から APMK の女性宣教師や教育事業を取り上げる研究が相次いだ。例えば、19 世紀末、APMK の内部にあった女性宣教師と男性宣教師の間の葛藤を取り上げ、女性宣教師のジェンダー意識（男性宣教師の指導下に置かれることなく独立した権限を持った宣教活動を目指した）に注目した研究[3]。また、APMK の中等学校（1 校の男子校と 1 校の女子校）を例にとって、オーストラリア宣教師たちは、朝鮮総督府の教育政策（宗教教育と神社参拝）にいかに対応しようとしたかを検討した研究[4]がそれである。

韓国における APMK に関する研究は、2000 年代に入って本格化した。まず、APMK が設立した女子校の卒業生として女性運動に励んだヤン・ハンナを取り上げた研究[5]など、ジェンダー史の観点から研究が始まった。朝鮮で活動したオーストラリア宣教師の思想と生涯、そして彼らを

送り出したPCVについてなど、神学・教会史の観点からの研究が後を継いだ[6]。教育史関係としては、APMKの教育活動に関する資料についての研究[7]や、具体的なアプローチとしてAPMKの女子校（日新女学校）の体育教育を取り上げた研究[8]を挙げられよう。このようにPCVの朝鮮宣教に関しては、同時期、朝鮮など東アジアへ渡って活動した他の欧米のプロテスタント教派に比べ、韓国においても欧米においてもその研究が立ち遅れていたが[9]、近年、教会史、宣教史、教育史、ジェンダー史などの視点から成果を挙げている。

本稿では、朝鮮におけるAPMKによる女子教育について、女性宣教師の認識に注目しつつ、学校教育の他に社会教育も視野に入れて明らかにする。特に、先行研究でそれほど検討されなかったPWMUの資料などを用いる。PWMUは1905年11月から、*The Chronicle of the Presbyterian Women's Missionary Union of Victoria*（以下、*The Chronicle*と略す。1926年7月号から*The Missionary Chronicle*へと改称）を刊行し、朝鮮へ派遣された女性宣教師の動静や書信などを大抵、毎号に掲載した。

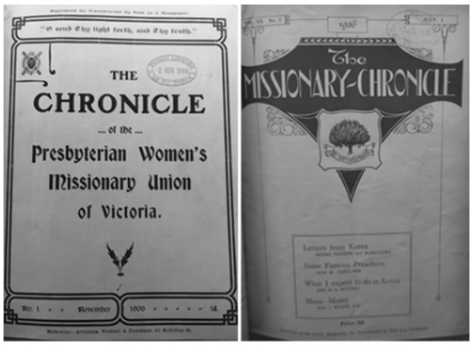


図1　PWMUの機関紙

この機関紙が刊行される以前、PWMUから派遣された女性宣教師に関するニュースなどは、PCVの機関紙に報じられた。最初のPCVの機関紙は、*The Christian Review and Messenger of the Presbyterian Church of Victoria*（1860～1877）で、それ以後、数回に亘って改称された。女性宣教師関係は、主に*The Presbyterian Monthly: the organ of the Presbyterian Churches of Victoria and Tasmania*（1894～1899）、*The Messenger of the Presbyterian Churches of Victoria and Tasmania*（1900～1917）に報じられたが、*The Chronicle*等に比べれば、記事数も少なく、内容も限られていた。

1．オーストラリア長老派教会朝鮮ミッションについて

（1）朝鮮宣教の開始と展開

PCVは、設立当時（1859年）、海外宣教委員会（Foreign Mission Committee）を立ち上げ、オーストラリア原住民、中国人移民者、ニューヘブリディーズ諸島（New Hebrides）の住民を対象に宣教活動を始めたが、東アジアなどへの海外宣教は開始しかねていた。しかし、デイビース牧師の意向やYMFUの財政支援により、朝鮮宣教は1889年に初めて可能となった。何よりもPWMUより1891年から朝鮮へ女性宣教師を送り出すことになり[10]、PCVの朝鮮宣教に拍車がかかった。YMFUは朝鮮宣教を志願する牧師とその家族を支援する役割を担い、PWMUは未婚の女性宣教

師を選定して朝鮮へ送り出し、支援するのはもとより、APMK が行う活動（病院、学校など）に必要な資金を調達する役割を果たした。

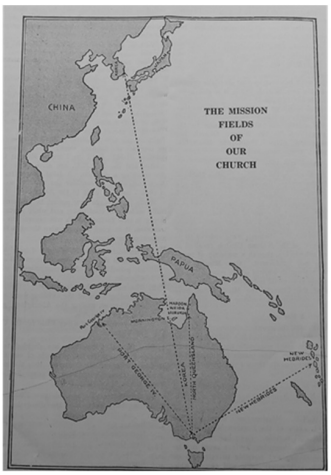


図 2　*The Chronicle*, June 1, 1940 より

19 世紀に欧米のプロテスタント教会（または教会の海外宣教団体）は、大概、複数の国家・地域に宣教師を派遣したが、PCV は朝鮮にのみ宣教師を送った。例えば、米国北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会（Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church）は、中国、日本、朝鮮の他、東南アジア、南米、アフリカ、ヨーロッパへ女性宣教師を派遣した[11]。左の写真は、PWMU の宣教地を表す地図として、*The Chronicle* の多くの巻号に掲載された。

1916 年に刊行された『小さな国の中の偉大な光』[12]によれば、PCV が朝鮮宣教を始めた背景には、デイビースという一人の牧師の志があった。「かつてから宣教事業に関心を持っていたデイビースという青年〔牧師按手を受ける前〕は、朝鮮宣教の必要性について聞き、可能であれば朝鮮へ行きたいと心を決めた」[13]と。デイビース牧師が釜山で活動を始めたいきさつについては、当時、漢城（現在のソウル）にはすでに多くの米国宣教師たちが活動しており、彼は、「宣教活動が実際に行われていない朝鮮の南部地方で活動を始めたい強い熱望を持つようになった」[14]という。

デイビース牧師は、なぜ朝鮮宣教に志したのか。その動機について、デイビース牧師の姪として 1910 年代に APMK に加わった二人の女性宣教師（M. S. Davies & E. J. Davies）の伝記の中に触れられた。英国国教会大執事であるウルフ（J. H. Wolfe）は、釜山に中国人宣教師を送ってミッションを開こうとしたが、イギリスの教会宣教協会（the Church Mission Society）から援助金を得られず、実現することができなかった。しかし、この話は、マカートニー牧師（Rev. J. H. Macartney）によって、ヴィクトリアの教会関係ペーパーの記事となり、それを読んだデイビース牧師は、朝鮮宣教を決心したという[15]。

その一方、PWMU は、なぜ、朝鮮へ女性宣教師を送り出したのか。『50 年後：ヴィクトリア長老派教会女性宣教連合会の活動の記録』[16]によると、PWMU の創立当時（1890 年）、女性宣教師を派遣する異教徒の地としてインドが有力視されたが、様々な支障があり、宣教地の選定は難航していた。しかし、デイビース牧師が朝鮮へ渡った翌年（1890 年）、病に倒れ死去したという悲報に接した PWMU は、1891 年に 3 人の未婚の女性宣教師（B. Menzies, J. Perry, M. Fawcett）を朝鮮へ派遣することを決めた[17]。これに対して、「ニューヘブリディーズ諸島へ未婚の女性宣教師を派遣した際と同様に、教会の男女は神の召し出しを受け、朝鮮へ送り出された。……私たち



図 3　*The Chronicle*, May 1, 1907 より

が朝鮮を選んだのではなく、神が朝鮮を選び出し、宣教師を送ったとみるのが正しいだろう」[18] と宗教的な説明が付け加えられた。

ともあれ、APMK は 1891 年に開いた釜山ステーションを筆頭に、晉州（1905 年）、馬山（1911 年）、居昌と統営（1913 年）にステーションを立て続けに開き、慶尚南道で教育、医療、社会福祉、伝道など、多岐にわたる活動を展開した。当時、朝鮮には PCV に先んじて米国北部長老派教会（1884 年）、米国北部メソジスト監督教会（1885 年）の宣教師が派遣されており、米国南部長老派教会（1892 年）、米国南部メソジスト監督教会（1896 年）、カナダ長老派教会（1898 年）なども次々と宣教師を送った。このように APMK は、朝鮮宣教の開始においてそれほど後れを取らなかったものの、管轄地域が他の教派より狭小で、後に記述するように、教育事業（学校数、生徒数）なども、他の教派に比べ小規模であった。

ここで、宣教師の活動をはじめて詳細に記した 1917 年度の『APMK の年次報告（抜粋版）』から彼らの活動についてまとめてみよう[19]。すでに 5 カ所にステーションが置かれ、APMK の活動が軌道に乗ったこの時期に、宣教師たちはそれぞれどのような仕事を担当していたかをステーション別に見てみる。それによって、APMK による事業の概略を示し、男性宣教師と女性宣教師（既婚、未婚）の間に役割はどのように分担されていたかも明らかにする。

1917 年度、APMK の構成員は、牧師 12 人、既婚の女性宣教師（牧師の配偶者）10 人、未婚の女性宣教師 14 人である。既婚の女性宣教師には準会員（Associate Member）の資格が付与され、未婚の女性宣教師と区別されていた。同年度の会長はマックラレン牧師（Rev. C. I. McLaren）、書記はエンゲル牧師（Rev. G. Engel）、会計はライト牧師（Rev. A. C. Wright）が就任しており、合計 36 人の宣教師のうち、5 人はサバティカルをとっていた。

まず、釜山ステーションには、牧師 3 人、既婚の女性宣教師 3 人、未婚の女性宣教師 3 人が所属した。エンゲル牧師は、同ステーションの会長であり、平壌に設立された長老派の神学校の講師を兼任し、聖書学校[20] にも出講した。彦陽と金海の責任者であり、釜山と東萊にある教会の牧師である。マッケンジー牧師（Rev. J. N. Mackenzie）は、蔚山南東部、機張、東萊、鬱陵島の責任者である。またハンセン病者収容施設の責任者であり、釜山所在の教会の牧師である。聖書学校にも出講した。ライト牧師は、梁山、密陽、昌寧の責任者であり、同ステーションの書記と会計を兼任し、講師として聖書学校にも出向いた。

一方、メンジース（Miss Menzies）は、孤児院（Myoora Institute）の責任者であり、教会の日曜学校女性班の責任者である。各種の女性クラスを補佐し、聖書学校にも出講した。デイビース

（Miss Davies）は、東萊の日新女学校の校長であり、東萊における女性対象のすべての活動の責任者であり、各種の女性クラスを補佐した。ホッキング（Miss Hocking）は、朝鮮に派遣されたばかりで、朝鮮語を学習するかたわら、各種の女性クラスを手伝った。

エンゲル夫人は、日曜学校や各種の女性クラスで教えた。マッケンジー夫人は、夜間聖書学校の責任者であり、日曜学校や各種の女性クラスで教えた。ライト夫人は、バイブル・ウーマンの監督者であり、各地域の女性クラスの責任者である。女性聖書学校で教え、日曜学校の仕事も分担した。

晉州ステーションには7人の宣教師が所属した。マックラレン牧師は、医者として同ステーションに設立された病院の院長に就いており、日本人対象の宣教活動も担った。マックラレン夫人は、幼稚園、女性夜間学校、各種の女性クラス、日曜学校女子生徒班を担当した。アレン牧師（Rev. A. W. Allen）は、同ステーションに設立された男子校と女子校の校長であり、男子校の寄宿舎の責任者である。日曜学校男性班の監督者で、病院の会計であり、南海、泗川、東晉州にある教会の主任である。カニングハム牧師（Rev. F. W. Cunningham）は、同ステーションの書記と会計であり、宜寧、河東、西晉州、山清、三嘉にある教会の主任牧師である。スコールズ（Miss Scholes）は、女子校や寄宿舎の責任者であり、各種の女性クラスの責任者でもある。また、日曜学校女性班の監督者であり、伝道活動を担った。クラーク（Miss Clerke）は、病院の看護師長であり、各種の女性クラスも担当した。ラング（Miss Laing）は、朝鮮語を学習しながら、地域巡回を担当した。各種の女性クラスにもかかわり、バイブル・ウーマンの監督もした。また、聖書学校にも出講し、日曜学校の仕事もした。

馬山ステーションには4人の宣教師が派遣された。マクレー牧師（Rev. F. J. L. Macrae）は、同ステーションの教会の主任牧師であり、同ステーションの書記と会計を兼任した。マクレー夫人は、朝鮮語を学習する一方で、日本人を対象にする活動を補助し、女子校の寄宿舎関係の仕事も担当した。ネーピア（Miss Napier）は、バイブル・ウーマンの監督者であり、各種の女性クラスの責任者でもある。また、管轄地域の巡回の仕事を引き受けていた。スキナー（Miss Skinner）は、朝鮮語を学習するかたわら、女子校の校長やその寄宿舎の責任者に就いており、管轄地域の巡回と各種の女性クラスを担当した。

統營ステーション（5人）のワトソン牧師（Rev. R. D. Watson）は、同ステーションの会計で、聖書教室を担当した。テーラー（Dr. Taylor）は医療活動をしながら、朝鮮語を学習し、固城の主任牧師や同ステーションの書記に就いた。テーラー夫人は、朝鮮語を学習しながら、医療活動を補助した。ムーア（Miss Moore）は、各種の女性クラスの責任者であり、バイブル・ウーマンの監督者でもある。ワトソン（Miss Watson）は、女子校の校長であり、各種の女性クラスを補助した。

最後の居昌ステーションには5人が所属した。ケリー牧師（Rev. J. T. Kelly）は、朝鮮語を学習

するかたわら、主任牧師として多数の教会を受け持ち、同ステーションの会計の役割も担った。ケリー夫人は、同じく朝鮮語を学習しながら、教会の女性班の責任者になっており、他の各種のクラスを補佐し、巡回の仕事も担当した。トマス牧師（Rev. F. J. Thomas）は、朝鮮語を学習するほかに、同ステーションの書記に就いており、巡回の仕事も担った。トマス夫人は、同じく朝鮮語を学習しながら、教会の女性班を補佐し、また、地域の巡回も担当した。エベリ（Miss Ebery）は、朝鮮語を学習するかたわら、地域の巡回や各種の女性クラスを補佐した。また、バイブル・ウーマンの監督もした。スコット（Miss Scott）は、朝鮮語を学習する一方、女子校に関わり、教会の女性班も補佐した。

以上のように、APMK は、医療（病院）、社会福祉（ハンセン病者収容施設と孤児院）、伝道（教会、聖書学校、巡回など）、学校教育、社会教育（地域住民むけの各種の女性クラスや夜間学校、女子生徒むけの技芸班・実業学校など）など、多岐にわたって活動を行った。また、その活動は性別で分担され行われた。牧師（そのうち 2 人は医者でもある）は、割り当てられた管轄地域の教会を担当し、各ステーションの幹部に就いた。また、各ステーションにある男子校の校長や病院の院長に就いており、聖書学校の講師をつとめ、教会の男性班を監督した。未婚の女性宣教師は、各ステーションの女子校の校長または責任者としてつとめ、また、多岐にわたる女性対象の活動（教会の女性班、各種の女性クラス、バイブル・ウーマンの監督、地域巡回）の責任者に就いた。既婚の女性宣教師は、基本的には未婚の女性宣教師を補佐したが、未婚の女性宣教師が新任者である場合では、責任者の地位に就いた。次のケリー（Miss Kelly、1905 年に赴任、後にマッケンジー牧師と結婚）の書信から、教会の日曜学校女性班や他の女性クラスにおいて、未婚の女性宣教師と既婚の女性宣教師の間にどのように役割が分担されていたか、その具体的な例をみることができる。

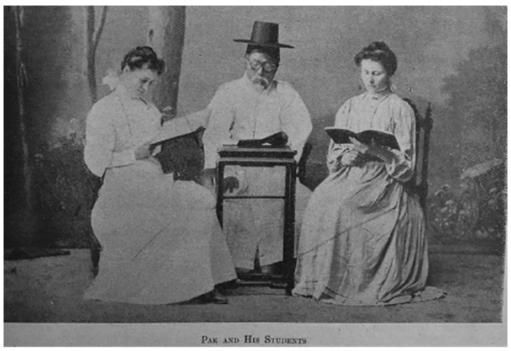


図 4　朝鮮人教師から朝鮮語を習う女性宣教師（左：Miss Niven, 右：Miss Kelly）
***The Chronicle*, January 1, 1907 より**

> カレル夫人（Mrs. Currell）と私は、日曜学校の女性班を 2 クラスに分けた。カレル夫人は文字が読める女性班、私は文字が読めない女性班を受け持った。平均 16 ～ 18 人が出席するが、ただ見物に来る女性も何人かいる。金曜日の夜間クラスには、婦人たちと女児たちがもともと聖書と教理を学ぶために集まるが、過去何週間かはクリスマス聖歌を習った。……この女性たちはとても聖歌を愛し楽しむが、中には文字が読めないがために出席できないかわいそうな女性たちがいる。彼女たちにとって聖歌をすべて暗唱するのはとても難しいこと

だ。この女性たちを助けるため、スコールズと私は、火曜日の夜に読み書きクラスを開いた。はじめは結構、人数が集まったが、彼女たちの熱意はすぐ冷めてしまった。しかし、このように軽々しく言うのはいけないことだ。訓練を受けたことがなく、理解力も落ちる彼女たちにとって、学習することはとても難しいだろうと言うのが正しいだろう。とにかく、多くの女性たちは熱意と興味をなくし、最後の何週間の火曜日にはただ3人の女性が来ただけだ。この3人が一番習いたがっているが、私たちは、彼女らのためにこのクラスを継続させることを、価値あることとして感じている[21]。

(2) 女性宣教師の認識

PWMUは、最初に女性宣教師を送り出した1891年から1941年に撤退するまで、朝鮮に35人の未婚の女性宣教師を派遣した[22]。彼女たちの朝鮮や朝鮮女性に関する考えは、他の教派の女性宣教師のそれとはあまり相違がない[23]。それは、19世紀半ば以降、欧米人の宣教師や旅行者などを通して、朝鮮をはじめ異教徒の地に関する一定の国際情勢的また民俗学的な知識や見解が欧米に普及し、各教派の女性宣教師たちは、派遣される以前からそのような知識や主張に触れていたからであろう。この節では、朝鮮の政治変動に関して、また、朝鮮文化や朝鮮女性について、女性宣教師たちを中心にAPMKの宣教師たちは、基本的にどのような認識を持ったかを検討する。

まず、朝鮮認識についてである。朝鮮に渡った宣教師たちは、教派を問わず、朝鮮の政治変動（日露戦争など）に対して、日本に友好的な見解（日本は朝鮮でいいことをしている）を持った。日本の朝鮮支配そのものに関しては政治中立という立場をとり、ほとんど無発言・無批判に一貫した。このような朝鮮認識はAPMKの宣教師たちの間にも例外なく共有されていた。

例えば、エンゲル牧師（1900年に朝鮮に派遣）は、1906年にメルボルンへ戻り、日本の朝鮮保護国化（1905年）を目の当たりにした者として、現地のメディアに次のように述べた。「私の個人的な観察から評価するが、日本の統監府は、結構、善政を施している。……しかし、朝鮮人から奪った農地を日本人に譲渡するのは、大きな問題になっている。特に朝鮮の北部地方の一帯を日本人はかなり抑圧的なやり方で占有した。この問題に対して人々は不満を宣教師たちに漏らしている。……私は（日本の）いかなる組織的な抑圧や野蛮な行為も見たことがないし、（日本の）残酷性を訴える不満な声を聞いたこともない。朝鮮人は不満があれば誇張して表現する人たちだが、彼らから統監府に対する不満の言葉を聞いたことがない。朝鮮人を搾取しようと権力で押さえつけるような行為を見たこともない。むしろ戦争〔日露戦争〕前の朝鮮政府のやり方がより悪く堕落していた」[24]。

また、1894年から1914年まで朝鮮で活動したアダムソン牧師（Rev. A. Adamson）は、1907年にメルボルンに戻り、釜山から満州にまで鉄道が敷設されたことを高く評価しながら、現地のメディアに次のように話した。「日本人の不屈の精神は、朝鮮半島においてもその力を発揮してい

る。これはすでに挙げている成果からも分かることだが、その精神は朝鮮人に良い影響を及ぼしている。この何年間、朝鮮人はとても知的に覚醒しており、実行力を持って来ている。元来、朝鮮人はとても怠慢な人たちだが、このような過去の安逸な態度を捨て、目的に向かって迅速に取り組むようになりつつある。……また、教育が発達している。全国に多くの学校が建てられている。朝鮮政府が支援する学校もあるが、その中には数学や外国語を教える学校もある。日本人たちも彼らの教育制度を導入して施行している」[25]。

ラング（1913年に朝鮮へ渡り、1932年に引退）は、1919年に本国に戻り、多数の教会を回って講演会を開き、自身の朝鮮での経験を証言した。彼女とのインタビュー記事によると、「ミス・ラングはこう言った。日本人の子どもたちと朝鮮人の子どもたちは、オーストラリアの子どもたちがそうであるように、道端や遊び場で一緒に遊んでいると。彼女はこう信じている。次世代になれば、朝鮮人の苦情は消え去るに違いないと。これは間違いのない事実であると。日本人たちは田舎の様々な環境を改善させているという。もっと良い商品が市場で売られ、ビルディングがより近代的に建てられ、全国に道路が造られたという。他に鉄道も発展の例として挙げられた」[26]と。このようにAPMKの宣教師たちは、日本・日本人を高く評価し、朝鮮半島が日本の支配下に陥ることに対して批判的な見方を取らなかった[27]。

しかし、女性宣教師たちがより視線を向けたのは、朝鮮文化や女性の生活であった。朝鮮人の生活文化（非衛生的で非合理的な衣食住の生活）、朝鮮人の慣習（家父長的な家族関係、迷信など）や道徳観念（宣教師たちには朝鮮人は罪意識が欠如しており、多くの男性たちが妾を持つなど、性的な道徳観念も低いと見られた）、そして朝鮮女性の状況（教育を受けられず、家事の奴隷）は、「文明の遅れ」として見なされた。女性宣教師たちは、こうした自身の認識を、本国に帰国した際に行った講演、本部に出した書信（これはPWMUの機関紙に紹介されたため、その内容は本国の信徒たちに伝わった）の中で明らかにした。

例えば、1891年、最初にPWMUから朝鮮に派遣されたメンジース（1924年に引退）は、1903年にメルボルンへ戻り、PWMUの年次会議で朝鮮人の先祖崇拝や怠慢さについて講演したり[28]、地域の教会で朝鮮人の習慣、迷信、女性たちの悲惨な状況について講演したり、写真の展示もしたりした[29]。

1892年に朝鮮へ派遣されたムーア（1919年に引退）は、1905年にメルボルンへ戻り、PWMUの年次会議で講演したが、そこで、「（ムーアは）異教徒の地の人々〔朝鮮人〕の生活風習について興味深い話をし、彼らを啓蒙する必要性を訴えた。また、彼らがクリスチャンになったとき、どのような変化が起きつつあるかについても述べた」[30]という。また、彼女は教会でも講演をし、朝鮮文化と風習（婚礼など）を紹介し、朝鮮女性の従属的な状況について、次のように語った。「多くの女性たちは奴隷のような状態に置かれている。朝鮮女性には纏足の苦痛はないが、彼女たちが精神的また物理的に力を得るためにはさらなる文明の進歩が必要であろう。福音を受け入れた

家の嫁たちの状況は、とてもよくなっている。そのような家の姑は、キリスト教の影響が及んでいない家の姑に比べ、嫁たちに対する態度が違う」[31]。

つづいて、1907年に朝鮮へ渡ったスコールズ（1919年に死去）は、着任当時、朝鮮人の生活環境を忌み嫌いながらも、朝鮮の女性と子どもに心から接していこうとし、次のように語った。

> 晉州の人々はとてもやさしくて親切だ。私たちの訪問に対しても敬意を払うのだ。私たちの仕事は決して楽しくないわけではないが、誰が果たして朝鮮の悪臭に慣れることができようか。（朝鮮人の家を訪問した際に）私たちはできる限り、（部屋に入らず）庭に座るようにしている。なぜなら、そこではわりに新鮮な空気が吸えるからだ。その時、近所に住む婦人たちと子どもたちが集まり、私たちを囲む。私はこの婦人たちにも話しかけられるのでありがたい。……誰でもクリスチャンホームと異教徒の家庭の違いが見分けられるだろう。クリスチャンホームは例外なく整理整頓され、綺麗だ。多くの場合、いくら小さな庭であっても花や植物や野菜が植えられている。私たちの小さな教会で朝鮮の婦人たちに会うのは大きな喜びだ。誰も晉州の婦人と子どもを愛せずにはいられない。彼らは多くの面で無知で汚いが、それに負けない愛しい魅力を持っている[32]。

このような女性宣教師たちの認識は、一種の朝鮮文化や朝鮮女性に関する「定説」としてオーストラリア人の間に普及した。例えば、PWMUの機関紙（*The Chronicle*）は、「朝鮮：その歴史と人民」というタイトルで、次のように記した。「ヨーロッパ人から見て、朝鮮人の衛生観念は受け入れ難い。……朝鮮人の男性はとても怠慢だ。他の世界でもそうだが、朝鮮の女性たちは家事もやり畑仕事もやる。……女性たちは自分の名前で呼ばれない。誰の妹、誰の娘などとして知られている。結婚して子どもがいると、誰の母として呼ばれる。朝鮮女性は自分を大事にできないし、ほとんど読めないし、女性が家の外に出るのはよくないことになっている。……宣教師たちが入ってくるまでは、文明化という西洋の観念は知らされていなかったため、女性たちは尊重されるべき存在として認識されなかった」[33]。

もとより、女性宣教師たちの朝鮮女性に対する見方は、女子教育の発展に伴って変化していった。スコールズは、朝鮮に渡って6年後、特に若い世代に生じている変化に対して二つの相反する感情（嬉しさと憂い）を持って次のように言った。「すべての面において朝鮮は変わってきている。私たちの仕事は、ある意味ではよりしやすくなり、ある意味ではよりし難くなるだろう。迷信は徐々に払拭されてきたが、それに代わって無関心、不敬、世俗化が顕著になりつつある。単純で子どものような信仰心と、無知であるからこそ持てた熱誠は、少しずつ消え去ってゆき、若い世代はイエスをキリストとして受け入れる前に、神のみ言葉を多く知り、クリスチャンが意味するところを理解するだろう。私たちはこのような変化を私たちの学校の中で見ている。少女

と少年たちは、彼らの親より広い考えや観点を持っているし、他国の習慣と宗教についても多く知っている。彼らは、自身の精神的覚醒を感じさせるような質問をし、自身の生き方を探し求めようとする。これらの変化は、どの国においてもそう簡単に起きるものではない。私たちの少女たちは､家に閉じ込められていた時には知らなかった誘惑にさらされているのだ」[34]。このように、スコールズは、西洋の物質文明がもたらす否定的な影響が朝鮮人の間に現れていると指摘し、また、女性にとって社会と接する機会が増えることも、必ずしもすべて良い結果をもたらすとはいえないという認識を示した。

もう一人、朝鮮女性たちに現れる新しい変化について、デイビース（M. S. Davies、1910 年から 1940 年まで女子教育を担当）は、次のように捉えた。「昨日、釜山近辺にある女子校の校長デイビース嬢は、4 回目の休暇を取り、メルボルンに到着した。……彼女は、朝鮮人の教育は大きな進歩をなし遂げていると言った。……女子生徒たちはますます洗練され、オーストラリアの都市における『新女性（フラッパー)』のようになり始めたという」[35]。彼女が教育を受けた朝鮮女性の変化を否定的に捉え、「フラッパー（flapper)」という表現を用いたとは思わない。また、彼女が 30 年近く勤務した日新女学校は、他のステーションの初等学校に赴任する女教師の供給源であったという点を考慮すれば、デイビースは、朝鮮女性たちの社会進出を促進する考え方を持っていたと思われる。

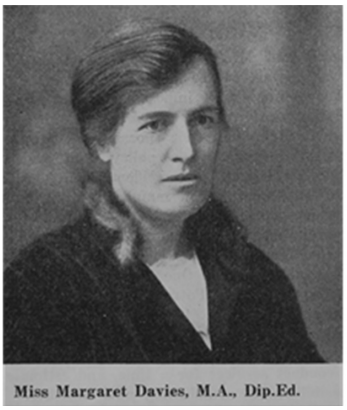

Miss Margaret Davies, M.A., Dip.Ed.

図 5　*The Missionary Chronicle*, September 1, 1938 より

こうした女子教育に伴って生じる朝鮮女性の変貌（社会進出など）に対して、ラングは、「異教徒の地の女性の地位は低い。彼女らの地位を向上させる唯一の方法は教育である。朝鮮で教育の価値はもう明らかになっている。なぜならば、若い女性たちは教育を終えた後、秘書、教師、看護師としての地位を得て社会に進出しているからである。これらの職業は彼女たちに独立と社会における地位を与えてくれるもので、以前には享受されなかった。今やこれらの地位についた女性たちは社会から尊敬さえ受けている。看護師のような賞賛される職業に就くことを可能にしたのは教育で、また朝鮮女性の知的能力のゆえである」[36] といい、女性の社会進出と活躍を肯定的にとらえた。このような考えは、多くの女性宣教師の中で共有されていただろう。

要するに、APMK の女性宣教師は、言うまでもなく、朝鮮文化（衣食住、慣習）の後進性や女性たちの抑圧性を西洋文明およびキリスト教によって改善していくことに大きな意義を見出した。それと同時に、自分たちにより持ち込まれる西洋文明の否定的な影響について杞憂した。宣教活動の何が賞賛すべき成果で、何が憂慮すべき結果なのか、それに対する見方・見解は、必ずしも女性宣教師の間でも同じではなかったにせよ、教会における活動や女子教育が朝鮮女性にも

たらす様々な変化は、女性宣教師を報い、励ましたに違いない。

2．オーストラリア長老派教会朝鮮ミッションによる女子教育

(1) 学校教育

まず、朝鮮の女子中等教育においてミッション系学校は何校あったかをみてみよう。(表 1) では、1937 年度の女子中等教育を公立女子高等普通学校、私立女子高等普通学校（一般とミッション系)、中等レベルの各種学校（一般とミッション系）に分け、その学校数と生徒数を示した。学校数は合計 41 校、生徒数は合計 9,269 人である。そのうち、ミッション系女子校（女子高等普通学校と各種学校）は、14 校（34.1%）で、それらの女子校に通う生徒は、3,866 人（41.7%）に達した。このようにプロテスタント・ミッショナリーにより開設された女子校は、朝鮮における女子中等教育を大きく担った。

表 1　朝鮮における女子中等教育の状況（1937 年）

公立女高普		私立女高普（一般）		私立女高普（ミッション系）		各種学校（一般）		各種学校（ミッション系）	
学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数
11	2,947	4	1,666	6	2,534	12	790	8	1,332

注：各種学校には中等レベルの朝鮮人むけの女子校のほか、内地人・朝鮮人共学、男女共学が含まれる。
出所：朝鮮総督府学務局『朝鮮諸学校一覧』1937 年度。

次の（表 2）では、ミッション系女子校（初等から高等教育まで）の現況を教派別に示した。初等教育機関から高等教育機関までの学校の総計は、米国北部長老派教会系の学校が最も多く、生徒数も一番多い。しかし、中等学校のみをとると、学校数も生徒数も最高に多いのは、米国北部メソジスト監督教会系である。その反面、オーストラリア長老派系の学校は、中等教育もまた初等教育も、学校数や生徒数において最下位を占めた[37]。

このように APMK の教育事業は、他の教派より小規模であったにせよ、慶尚南道で女子教育を最初に開始し、その発展に貢献した。(表 3) は、APMK により行われた学校教育をまとめたものである。APMK の女性宣教師は 1893 年に女子教育を始めたが、(表 3) の教育統計は資料の関係上、1911 年度以降になっている（欠落年度あり)。中等学校（4 カ年の修学課程で、7 ～ 10 年次の教育が行われる学校）が設置される（1925 年）以前、1922 年度における初等学校（4 年次までの学校）は、17 校（生徒数 2,399 人)、高等科が設置された初等学校（時期によって修学期間 6 ～ 8 年）は、2 校 (男子校 1 校と女子校 1 校) であった。1920 年度に高等科が設置された初等学校は 5 校もあったが、そのうち、3 校は 4 年次までの初等学校に戻されたようである。

表 2　朝鮮における主なプロテスタント教派別の女子教育の状況（1926 年）

教派		米国北部メソジスト	米国南部メソジスト	米国北部長老派教会	米国南部長老派教会	豪州長老派教会	カナダ長老派教会	合　計
朝鮮宣教開始年		1885	1896	1884	1892	1889	1898	
女子高等	学　校　数	1	−	−	−	−	−	1
	学　生　数	110						110
	教　師　数	12						12
女子中等	学　校　数	5	3	5	5	1	4	23
	生　徒　数	564	299	326	220	129	141	1,679
	教　師　数	44	33	36	19	12	41	185
女子初等	学　校　数	47	10	204	57	3	12	333
	生　徒　数	4,078	1,302	4,432	2,130	508	1,147	13,597
	教　師　数	147	50	84	79	18	34	412
合計	学　校　数	53	13	209	62	4	16	357
	学　生　数	4,752	1,601	4,758	2,350	637	1,288	15,386
	教　師　数	203	83	120	98	30	75	609

注：女子中等：7 年次〜、女子初等：6 年次まで
出所：Protestant Evangelical Missions in Korea, *Sixteenth Annual Meeting of the Federal Council of Protestant Evangelical Missions in Korea*, 1927.

1925 年以降、中等学校は増えず、男子中等学校 1 校、女子中等学校 1 校の現状のまま、APMK による中等教育は継続された[38]。1 校の女子中等学校とは、東萊にある日新女学校（1893 年に開いた孤児院の女子を対象にはじめた女子教育から発展した学校）である。1930 年代後半に在籍者が急増したが、APMK は 1940 年に神社参拝問題で教育事業から手を引くことを決め、この女子校を朝鮮人に売却した。

以上のような APMK の教育事業は、1911 年の教育事業の基本政策に関する取り決めによって行われた。女子教育に関しては、宣教師が居住するすべてのステーションに必ず初等学校を開設して継続させること、PCV は各ステーションに学校の建物と寄宿舎を提供すること、APMK の管轄地域が慶尚道の全地域へと拡大しない限り、晉州に設備の良い女子中等学校を建てて最小限二人の女性宣教師を配置することが決められた[39]。また、高等教育に対する APMK の方針も議決され、「私たちの宣教会は大学を設立する方針を持たない。しかし、他の宣教会によっ



図 6　APMK の最初の女子校
***The Chronicle*, June 1, 1907 より**

表 3　APMK による学校教育

年度	初等学校				高等科を持つ初等学校				中等学校				朝鮮人教師		
	学校数	男子生徒	女子生徒	合計	学校数	男女生徒	女子生数	合計	学校数	男子生徒	女子生徒	合計	男子	女子	合計
1911	7	200	138	338	1	−	7	7	−	−	−	−	14	5	19
1916	17	536	225	761	4	188	243	431	−	−	−	−	29	21	50
1917	7	192	139	331	5	218	292	510	−	−	−	−	29	22	51
1918	9	199	111	310	5	256	334	590	−	−	−	−	24	29	53
1919	6	138	102	240	4	177	318	495	−	−	−	−	19	22	41
1920	5	262	140	402	5	360	493	853	−	−	−	−	22	22	44
1922	17	1,351	1,048	2,399	2	139	84	223	−	−	−	−	27	23	50
1925	5	410	569	979	−	−	−	−	2	107	97	204	69	61	130
1928	5	281	546	827	−	−	−	−	2	143	126	269	60	54	114
1929	4	229	706	935	−	−	−	−	2	88	136	224	56	77	133
1930	4	170	615	785	−	−	−	−	2	97	119	216	62	120	182
1931	4	214	695	909	−	−	−	−	2	65	109	174	101	116	217
1932	4	190	706	896	−	−	−	−	2	38	115	153	64	91	155
1933	4	170	732	902	−	−	−	−	2	35	112	147	66	73	139
1934	4	195	790	985	−	−	−	−	2	8	122	130	56	71	127
1935	4	221	832	1,053	−	−	−	−	2	32	144	176	71	85	156
1936	4	266	881	1,147	−	−	−	−	2	28	165	193	45	76	121
1937	4	320	1,082	1,402	−	−	−	−	2	23	173	196	47	85	132
1938	4	296	963	1,259	−	−	−	−	2	40	180	220	42	79	121
1939	4	285	899	1,184	−	−	−	−	1	−	192	192	49	79	128
1940	1	−	120	120	−	−	−	−	−	−	−	−	26	51	77

出所：*Annual Reports of the Australian Presbyterian Mission*, 1911 & *Extracts from the Records of the Australian Presbyterian Mission in Korea*, 1916-1940

てすでに開設された大学は利用する。私たちの宣教会は、平壌で開設された神学校において、他の長老派の宣教会に継続的に協力する方針をとる」[40] といい、高等教育を実施する計画は最初から求められず、ただ必要に応じて（APMK の学校の卒業生がより上級の教育を受ける場合）他の宣教会の高等教育機関を利用することとした。これらの取り決めは、1913 年、「女子中等学校は釜山に設立されなければならない。それを担当する女性宣教師は晉州から釜山へ移動しなければならない」[41] と議決された点を除けば、APMK の基本教育政策として維持された。上述した日新女学校は、この 1913 年の取り決めによって 1925 年に中等学校に昇格された学校である。

上述したように、APMK の女性宣教師たちが女子教育を始めたのは、1893 年である[42]。女子教育を開始したメンジースは、後にその経緯について、オーストラリアの全州から参加する女性宣



図 7　1910 年度に釜山の女子校の初等課程を修了した生徒、女教師（前列の一番左端と右端の二人の女性）、女性宣教師（Miss Niven）
***The Chronicle*, November 1, 1910 より**

教連合会（1909 年）における報告で述べ、それが PWMU の機関紙に次のように報じられた。「孤児院は仕方なく始まった。1893 年に干ばつと飢饉が酷く、女性宣教師たちは、彼女たちに送られてくるか道端に捨てられた、飢えている小さな女の子たちを救済しなければならなかった。このような行動は朝鮮人の心に大きな反響を引き起こし、多くの朝鮮人にクリスチャンの愛について最初のインサイトを与えた。また、この孤児院は女子校への道を切り開いた。朝鮮人たちは、女子に教育を受けさせる、女子を学校に行かせる理由を見出していなかったが、町の小さい女の子たちは、孤児院の女子たちが教育を受けている姿をみて、自分たちも教わりたいと願うようになり、これが今発展している女子校の始まりなのだ」[43] と。

このように孤児院の女子を対象に始まった女子教育は、1895 年に孤児院の中で併設された昼間学校（3 年課程のデイスクール）で行われ、1900 年代後半には孤児院から分離された新築校舎で実施されるようになった[44]。1907 年、メンジースは、「（夏季休業後）私は女子生徒のための上級課程を開くことを希望する。そこで漢文を教えられればと願う。もし、私たちが初級課程を終えた女子生徒を手放さず引き続きこの学校に置いておこうとするならば、漢文を教えなければならない時期に来ている」[45] といい、上級課程の開設にかかわる考えを本部に明らかにした。この女子校は 1909 年に高等科（4 カ年）を持つ初等教育機関（8 カ年の修学課程）として発展し、1913 年 3 月にすべての課程を修了した卒業生 4 人がはじめて輩出された[46]。そして、上述したように、1925 年には女子中等教育を行った。



図 8　日新女学校の新築校舎
***The Chronicle*, April 1, 1909 より**

当時、欧米から朝鮮に渡った女性宣教師は、教派を問わずほとんど女子教育を実施した。そして女子教育に関しても共通の考えを持っていたといえる。彼女たちは、家庭を社会・国家の根幹として捉え、家庭に対する責任を持つ女性の教育を何より重要視した[47]。APMK の女性宣教師として最初に女子教育を始めたメンジースは、「国家が発展するために妻と母は教育を受けなければならな

い」[48]という見解を明らかにした。また、PWMUは、メンジースらが始めた女子校について紹介したのち、次のように語った。「誰が女子校の価値を評価できようか。女子校からクリスチャンの妻と母たちが将来に輩出されるだろう。私たちは知っている。揺り籠を揺らす手が世の中を支配するということを」[49]。

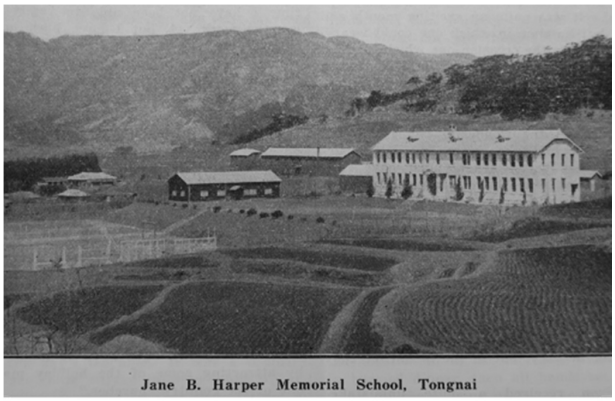


図9　日新女学校
***The Missionary Chronicle*, December 1, 1933 より**

女子生徒たちは、以上のような基本認識から行われる学校教育について、どのように受け止めたのか。女子生徒は、母や主婦となる立場から教育を受けているという点を、意識していたように思われる。一例であるが、初等課程（4カ年）を修了した女子生徒は、終業式で次のように語った。「過去、朝鮮人は、男子は学ぶべきだが、女子教育は必要ではないと言って、女子が漢文を習ってどこに使うかという疑問を持っていた。しかし、私たちは漢文だけを学ぶわけではない。私たちは縫物を習って私たちの服を作っており、ほかにもたくさんの有用な知識を学んでいる」[50]。

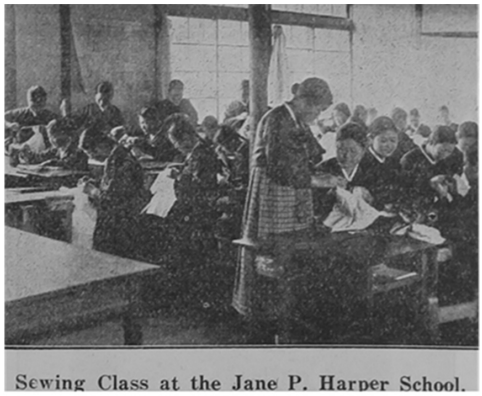


図10　日新女学校の裁縫授業
***The Missionary Chronicle*, November 1, 1937 より**

とはいえ、女子校には朝鮮人女教師たちが多数、存在した。孤児院の初期メンバーとして初等課程を終えたのち教師となった女性ら（後に、APMKの女子中等学校ができる前、平壌の米国北部長老派の女子中等学校へ進み、卒業する）を含め、女子校の卒業生は教師となって女性宣教師の指導を受けながら女子生徒を教えた[51]。女子生徒はこれらの女教師を自分の将来像としても見ていたはずである。本稿で取り上げる宣教師関係の資料の中には女子生徒の思い・考えをあらわすものは非常に少ないため、十分な分



図11　孤児院の庭で女性宣教師（Miss Menzies）など
***The Chronicle*, August 1, 1916 より**

析ができないが、こうした女性宣教師による女子教育をどのように受け取ったかに関しては、今後の課題としたい。

（2）社会教育

APMK は、女子校の他に、実業学校（技芸班、農場学校など、上記の学校に併設される）、学校に通えない女子や地域の婦人たちのための夜間学校をステーションに開いた。（表 4）は、これらの教育事業を、社会教育として位置づけてまとめたものである[52]。

APMK は、1914 年度の「教育委員会報告」によると、釜山の女子校に技芸班（Industrial Self-help Department）を開設することにした[53]。その後、時期は不明だが、統營と晉州ステーションの女子校にも技芸班が開かれた。技芸班は、貧困家庭の女子も教育を受けられるように、女性宣教師に教わって手芸品などを作り、それをメルボルンの教会の信徒たちに売り、その利益を学費や生活費などに充てることを目的とした。これらの技芸班はいつまで存続したかはわからないが、少なくとも統營ステーションの技芸班は継続された。（表 4）の実業学校（Industrial School）とは、統營ステーションの女子校に併設された技芸班と東萊日新女学校に併設された農場学校（1936 年に開設）のことである。

フランシス（Miss Francis、1924 年に派遣され、1930 年に引退）は、統營ステーションの技芸班のプログラムと生徒たちについて紹介した後、次のように技芸班の意味について述べた。「貧

表 4　APMK による社会教育

年度	実業学校		夜間学校	
	学校数	生徒数	学校数	生徒数
1925	1	15	33	1,286
1928	1	23	25	833
1929	1	20	24	726
1930	1	28	44	1,179
1931	1	52	43	1,479
1932	1	46	29	1,074
1933	1	46	30	1,136
1934	1	70	15	943
1935	1	20	19	1,193
1936	2	105	12	925
1937	2	127	11	882
1938	2	137	7	635
1939	2	138	8	872
1940	2	137	13	1,150

出所：（表 3）と同じ。

しい環境に置かれている少女たちに私たちはどうして知らぬ顔をしてそのまま放っておくことができようか。私たちは彼女らに自助の機会を与えることで彼女らを助けているが、この技芸班はその機会を提供している。これらの事業がどれほど価値あるものかをみなさんも納得するだろうと私は確信する」[54]。

また、PWMUの年次会議について報道したメルボルンのメディアの記事の中に[55]、計画中の農場学校（Farm School）が紹介された。後に開設されたときは、「（農場学校は）女子生徒に生活費を稼ぐ機会を与えることで、彼女らに新しい人生を切り開いている」[56]と報じられた。これらの事業は、オーストラリアで集まる寄付金に頼っていたため、このようにオーストラリアのメディアに報じられることは、大きな意味があった。

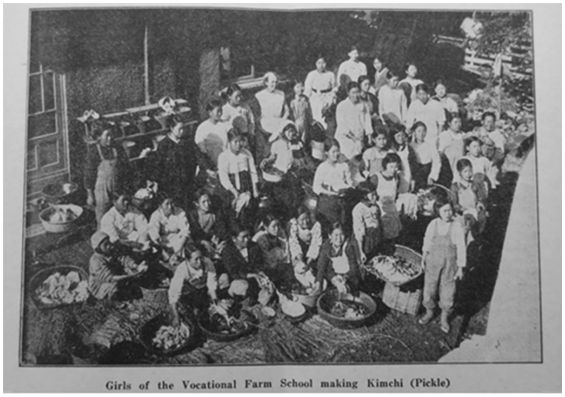


図12　東莱の農場学校
***The Missionary Chronicle*, July 1, 1939 より**

いかに貧しい女性たちを救うかの他に、多くの女子や婦人たちは、学校教育を受けられず、読み書きができないという現状も、女性宣教師たちにとって大きな問題であった。これに対する女性宣教師の応えは夜間学校であった。夜間学校は正確にいつから開設されたかは定かではないが、1908年にはすでに始まっていた。

例えば、ニベン（Miss Niven、1905年に派遣されたが、1927年に死去）は、夜間学校について次のように報告した。「夜間学校は、現在、それほど満足できない状態だ。女子たちは早朝から一日中苦労して働き、夜遅く晩ご飯を食べる。これは、彼女らが夜間学校に来る時間にはあまりにも疲れて眠気に襲われ、勉強しづらくなることを意味する。額に漢字で書かれた札（マラリアの再発防止の願いを込めた）を貼り付けている子どもを見て、私たちはいかにクリスチャンの教えが必要かを再度、知覚する。私たちは一人の女子に、どうして髪の毛を綺麗にといてから学校へ来ないのかと聞いた。答えはこうである。『私たちはあまりにも忙しく余裕がないので髪の毛をとく暇はありません』と。可哀そうな小さな命の暗い心ではないか。しかし、私たちの光は彼女らの暗闇より強い。私たちの光はこれらの暗闇を追い出すだろう」[57]。この夜間学校は、（表4）からもわかるように、ステーションの様々な事情（寒さや暑さなどの気候、担当宣教師・教師の有無、教室問題）で一時期閉じられたり、再度開かれたりして、実態の変動が常に目立った。

夜間学校の他に、各ステーションには地域の婦人や子どもを相手にする様々なクラスも開かれた。これらのクラスは、朝鮮の女性たちが女性宣教師と交流する不定期の集合時間であり、そこで読み書き、啓蒙教育、宗教教育などが行われた。朝鮮女性にとってのこの時間の意味について、

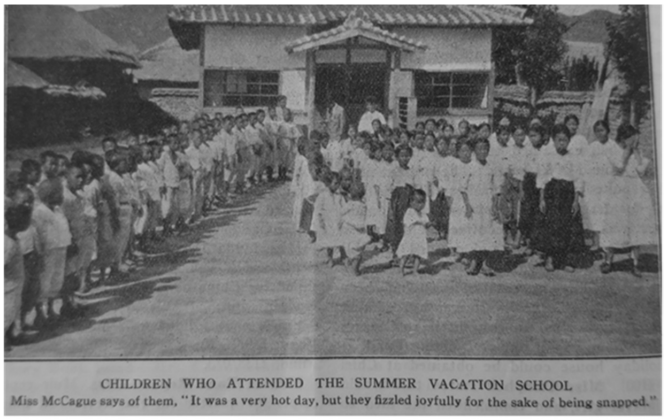


図 13　夏季休業中の子どもクラス
***The Missionary Chronicle*, January 1, 1927 より**

女性宣教師は次のように述べる。「セアムで新しい女性クラスを開いた。婦人たちがこのクラスに来るということは、多くの自己犠牲を払ってくるということだ。なぜなら、母としてやらなければならない家事から抜け出して来るからだ。これは、福音は家事の奴隷になっている朝鮮の女性たちを自己の義務から離れて休ませていることを意味する」[58]。

このように、女性宣教師たちが開く各種のクラスは、朝鮮の女性たちに以前にはなかった女性同士の交流時間、学習時間を与える場になったが、いきいきとこの時間に打ち込む女性たちの姿が次の例から見てとれる。「このクラス（学校が冬季休業に入った後に開かれた女性クラス）では、聖書の他、衛生学も教える。私たちの衛生観念は彼らには耳慣れないもので、クラーク〔1910 年に派遣され、1936 年に引退〕の衛生講義は今まで彼女らが見聞きしたことのない話で、彼女たちの目を覚ましたのだ。例えば、澄んだ空気と沸騰した水の大切さなど。一人の婦人は、すべての水を沸騰させてから使うと病人が少なくなったと証言したが、これに対して他の婦人は、ばい菌が喜ぶような発言、つまり、沸騰した水は美味しくないと反駁した」[59]。



図 14　晉州の女性クラス
***The Chronicle*, August 1, 1924 より**

おわりに

本稿では、オーストラリア長老派教会によって朝鮮宣教が開始された経緯や、同教派の女性宣教師たちが持った朝鮮や朝鮮女性に関する認識を明らかにした。また、女性宣教師たちによって慶尚南道で行われた女子教育（学校教育と社会教育）の実態はもとより、女子教育にかかわる女性宣教師たちの考えも明らかにした。

女性宣教師たちは、当時の欧米女性が異教徒の地の女性たちに向けた眼差し（文明の遅れに

よって虐げられている惨めな存在で、自分たちの手によって救われなければならない存在）と同様に、朝鮮女性を見ており、彼女たちに教育を施し導こうとした。女子校のほかに、文字の読めない地域の婦人たち、貧しさで学校に通えない地域の子どもたちのために夜間学校などを設け、読み書きや衛生教育など啓蒙活動にも励んだ。女性宣教師たちの教育を受けた朝鮮女性の一部は教師になり、増加する女子生徒の教育を任され、朝鮮の女子教育を大きく担っていった。

本稿では、オーストラリア長老派教会朝鮮ミッションの資料や女性宣教師たちの報告や書信を用いて分析を行ったため、女性宣教師たちの考えは比較的に明らかにできたが、彼女たちの教育を受けた朝鮮人女子生徒側の意識は十分に検討できなかった。また、女性宣教師に育てられた朝鮮人女教師や日本語授業のために雇用された日本人女教師に関してもあまり取り上げていない。今後、生徒たちがみていた女性宣教師や朝鮮人女教師について考察する必要がある。また、女教師たちが女性宣教師たちの教育についてどのように考え、いかに評価したかを明らかにしなければならない。

最後に、本稿では、朝鮮へ渡って活動した欧米のプロテスタント教派のうち、APMK の女性宣教師を取り上げ、彼女たちの認識は、他の教派の女性宣教師たちとあまり差異がないとみた。異教徒の地の女性に対する眼差し（文明観）、女子教育に対する考えなど（ジェンダー意識）において、当時の女性宣教師たちの認識は、教派を問わず概ね一致していると言える。しかし、女性宣教師たちのジェンダー意識を、女性参政権問題や高等教育実施問題などを含めて考察した場合、必ずしも彼女たちの見解（教派の内部においても、教派間においても）は一致せず、多様な立場に分かれていたとみられる。例えば、本稿で取り上げた APMK は、女子高等教育を実施する構想を最初から持っておらず、女性宣教師たちも女子高等教育に関する考えを打ち出すことはなかった。それに比べ、米国北部メソジスト監督教会と米国北部長老派教会は、女子高等教育に賛同し、とりわけ前者は 1910 年からカレッジレベルの教育を朝鮮で実施した[60]。今後、女性宣教師たちの認識を、彼女たちが所属した教派、彼女たちの教育的背景、女性運動（参政権運動、高等教育運動など）に対する立場などを考慮してより詳細に考察しなければならない。

註

1）Edith Kerr ＆ George Anderson, *Australian Presbyterian Mission in Korea, 1889–1941*, Sydney: Australian Presbyterian Board of Missions, 1970.

2）Agnes Talsma, *There Were Many Women: Prayer, Work, Money, United in a Century of Service, 1890–1990*, Melbourne: PWMU, 1991.

3）Hyaewoel Choi, “Claiming Their Own Space: Australian Women Missionaries in Korea, 1891–1900,” *Australian Historical Studies*, Vol. 48, 2017, pp.416–432.

4）Yoonmi Lee, “Religion, Modernity and Politics: Colonial Education and the Australian Mission in

Korea, 1910–1941," *Paedagogica Historica: International Journal of the History of Education*, Vol. 52, 2016, pp.596–613.

5）李松姫「ヤン・ハンナの生涯と活動に関する一考察」新羅大学校『女性研究論集』第 13 集、2002 年、5–37 頁、韓国語。

6）例えば、鄭・ビョンジュン『オーストラリア長老派教会宣教師たちの神学思想と韓国宣教、1889–1942』（韓国基督教歴史研究所、2007 年）韓国語；ヤン・ミョンドク編『韓国教会とオーストラリア教会』（ハンジャン社、2012 年）韓国語；同編『オーストラリア宣教師 John P. Brown』（ハンジャン社、2013 年）韓国語；李象奎『Gelson Engel の韓国宣教』（崇實大学校韓国キリスト教文化研究院、2017 年）韓国語など。

7）リ・ユンミ「植民地時期、オーストラリア宣教師の教育活動―オーストラリア長老派教会宣教部の資料を中心に―」『韓国教育史学』第 35 巻 1 号、2013 年、265–291 頁、韓国語。

8）朴・キスン「日帝強占期の釜山日新女学校の体育活動に関する研究」『韓国体育史学会誌』第 19 巻 2 号、2014 年、45–57 頁、韓国語。

9）APMK 以外のプロテスタント教派に関する先行研究に関しては、拙著「戦前の東アジアにおけるアメリ人女性による女子高等教育―アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会（WFMS）の活動を中心に―」筑波大学大学院人文社会科学研究会歴史・人類学専攻『歴史人類』第 47 号、2019 年、54–74 頁；同「朝鮮に渡ったアメリカ・プロテスタント女性宣教師―アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会を中心に―」筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻『歴史人類』第 46 号、2018 年、103–126 頁；同「朝鮮におけるアメリカ・プロテスタント宣教師による女子教育―米国南長老教会朝鮮ミッションを中心に―」筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻『歴史人類』第 43 号、2015 年、103–126 頁などを参照。

10）19 世紀末まで、オーストラリアにおいて、ヴィクトリア州（Victoria）の他に、ニューサウスウェールズ州（New South Wales）、クイーンズランド州（Queensland）、サウスオーストラリア州（South Australia）にも、長老派教会女性宣教連合会（the Presbyterian Women's Missionary Association of New South Wales、the Presbyterian Women's Missionary Union of South Australia、Queensland Presbyterian Women's Missionary Union）がそれぞれ結成された。ニューサウスウェールズ州の PWMA は、インドへ宣教師を派遣したが、サウスオーストラリア州の PWMU とクイーンズランド州の PWMU の場合、海外へ宣教師を派遣したかどうか、今のところ不明である。

11）拙著、2018 年を参照。

12）Frances L. Clerke & Margaret S. Davies, *A Great Light in A Little Land*, Melbourne: Brown, Prior & Co., 1916. これは、同じ年（1910 年）に朝鮮へ派遣された二人の女性宣教師が執筆したも

ので、オーストラリア長老派教会員の間に朝鮮宣教への関心を引き起こすために制作された学習用の冊子である。

13）Frances L. Clerke & Margaret S. Davies、前掲書、29 頁。

14）Frances L. Clerke & Margaret S. Davies、前掲書、29–30 頁。

15）John Thompson-Gray, *How Great Thine Aunt: The Life and Times of Missionary Sisters*, Publicious Book Publishing, 2018, p.5.

16）Elizabeth M. Campbell, *After Fifty Years: A Record of the Work of the P.W.M.U. of Victoria*, Spectator Publishing Co. Pty. Ltd., 1940.

17）1891 年、3 人の女性宣教師の他、マッカイ牧師（Rev. J. H. Mackay）とマッカイ夫人も派遣された。

18）Elizabeth M. Campbell, Ibid, p.8.

19）Australian Presbyterian Mission Secretary's Office, *Extracts from the Records of the Australian Presbyterian Mission in Korea*, 1917, pp.17–21.

20）聖書学校はクリスチャンたちに聖書の他、衛生などの知識も教えた。そこで訓練された一部の信徒は、宣教師の活動を補佐した。女性の場合は、バイブル・ウーマンと呼ばれ、女性宣教師の活動（巡回伝道活動、各種の女性クラス）の際に、地域の住民を呼び集めたり、女性宣教師の談話を補足したりし、女性宣教師に協力した。バイブル・ウーマンは女性宣教師の活動に必要不可欠な存在であった。

21）"Miss Kelly Writes from Chinju, Korea, Dec. 11, 1907," *The Chronicle*, Mar. 1, 1908, p.2.

22）その名簿は、Elizabeth M. Campbell、前掲書、57–58 頁に記載されている。

23）拙著、2019 年、2018 年、2015 年などを参照。

24）"Colonizing Korea: Japanese Methods, A Missionary's Impressions," *Daily Telegraph*, Dec. 20, 1906.

25）"A Missionary's Impressions." *The Age*, Jul. 23, 1907.

26）"Life in Korea, Interview with Lady Missionary," *Morning Bulletin*, Mar. 29, 1919.

27）APMK の宣教師たちは、1919 年、3・1 独立運動の際に、設立した女子校の生徒や朝鮮人女教師が逮捕されると、政治的な発言・関与は避けつつも、投獄された生徒と女教師を支援した。

28）"Women's Missionary Union," *The Messenger of the Presbyterian Churches of Victoria and Tasmania*, Dec. 11, 1903.

29）"Women's Missionary Union," *The Messenger of the Presbyterian Churches of Victoria and Tasmania*, May 13, 1904.

30）"Presbyterian Mission," *Geelong Advertiser*, Nov. 29, 1905.

31）"Korean Mission," *The Broad Courier and Reedy Creek Times*, Jun. 8, 1906.

32）“Miss Scholes Writes from Choriyang, Korea, under date Jul. 3, 1907,” *The Chronicle*, Sep. 1, 1907, pp.3–4.

33）“Korea: Its History and People,” *The Chronicle*, Nov. 1, 1907, pp.3–5.

34）Miss Scholes, “New Korea,” *The Chronicle*, Aug. 1, 1913, p.9.

35）“Conditions in Korea,” *The Armidale Express and New England General Advertiser*, Sep. 9, 1932.

36）“Missions in Korea, Talk with Missionary,” *Daily Mercury*, Jun. 5, 1925.

37）今のところ、1926 年度の統計のみで、他の年度の関連資料は入手されていないが、このような教派別の女子教育の傾向は、1930 年代、40 年代もそれほど変わらなかったと考える。

38）1925 年度以降の『APMK の年次報告書（抜粋版）（*Extracts from the Records of the Australian Presbyterian Mission in Korea*）』には、幼稚園と簡易学校（Sub-primary School）の統計も提示されたが、ここでは省いた。

39）“Special Meeting of Mission Council, with the Commission of the Foreign Mission Committee,” *Extracts from the Records of the Australian Presbyterian Mission in Korea*, 1911, p.9–11.

40）前掲書、1911, p.12.

41）“Annual Meeting of Mission Council,” *Extracts from the Records of the Australian Presbyterian Mission in Korea*, 1913. p.41.

42）Edith A Kerr & George Anderson, 前掲書（Myong Duk Yang 編訳『オーストラリア長老派の韓国宣教の歴史 1889–1941』図書出版トンヨン、2017 年）においては、APMK の女性宣教師により 1892 年に釜山で孤児院が開設され、女子教育も同年に始まったとされた。しかし、本稿は PWMU の *The Chronicle* の記事（1909 年 11 月 1 日、注 43）に依拠して 1893 年とした。

43）“Editorial Notes,” *The Chronicle*, Nov. 1, 1909, pp.1–2.

44）東莱女子高等学校の他『東莱学園 100 年史（1895–1995）』学校法人東莱学園、1995 年によると、新築校舎は 1905 年に完成した。しかし、*The Messenger of the Presbyterian Churches of Victoria and Tasmania* の 1905 年 6 月 16 日の記事（メンジースの書信）には、女性宣教師たちは孤児院と分離された新築校舎を強く希望しているという。また、*The Chronicle* の 1907 年 9 月 1 日の記事（ムーアからの書信）によれば、1907 年に新築校舎の一部ができ、そこで授業が行われていたという。そして、ニベンの報告によれば、1908 年に新築校舎が完成したようである。“Miss Niven writes from Fusan, Apr. 21, 1908,” *The Chronicle*, Jul. 1, 1908, pp.6–7.

45）“Letter from Miss Menzies, Korea,” *The Chronicle*, Jul. 16, 1907, p.2.

46）“Miss Niven writes from Fusanchin, Mar. 31, 1913,” *The Chronicle*, Jul. 1, 1913, pp.4–5; “The First Graduates from the Primary School at Fusanchin,” *The Chronicle*, Jul. 1, 1913, p.12. この卒業生 4 人のうち、3 人は教師となった。

47）拙著、2019 年、2018 年、2015 年を参照。

48）Myong Duk Yang、前掲書、80 頁。

49）“Girls’ School, Fusan,” *The Chronicle*, Feb. 1, 1907, p.3.

50）“Miss Scholes writes from Chinju, Mar. 30, 1914,” *The Chronicle*, Jul. 1, 1914, pp.3–5.

51）女性宣教師が本部に送った書信の中には、元卒業生で女教師になった者に対する言及が少なくない。例えば、“Miss Niven writes from Fusan, under date Jan. 15, 1908,” *The Chronicle*, April 1, 1908, pp.2–4; “Report of Old Station, 1907–1908,” *The Chronicle*, Feb. 1, 1909, pp.2–3; “Miss Niven writes from Fusanchin, Mar. 10, 1909,” May 1, 1909, p.5; “Miss Scholes writes from Chinju, Korea, Jun. 30, 1909,” *The Chronicle*, Sep. 1, 1909, pp. 2–3; “Miss Niven writes from Fusanchin, Korea, Sep. 25, 1909,” *The Chronicle*, Dec. 1, 1909, pp.2–3; “Miss Clerke write from Fusanchin, Korea, Mar. 24, 1910,” *The Chronicle*, Jun. 1, 1910, pp.2–3; “Miss Davies writes from Fusanchin, Korea, Nov. 3, 1910,” *The Chronicle*, Jan. 2, 1911, p.5; “Miss Scholes writes from Chinju, May 31, 1911,” *The Chronicle*, Aug. 1, 1911, p.7; “Miss Davies writes from Chinju, Dec. 4, 1911,” *The Chronicle*, Feb. 1, 1912, p.2; “PWMU Annual Meeting and Conference, May 16, 1912,” *The Chronicle*, Jun. 1, 1912, pp.6–8; “The First Graduates from the Primary School at Fusanchin,” *The Chronicle*, Jul. 1, 1913, p.12; “Maymoury,” *The Chronicle*, Aug. 1, 1913, p.5; “Miss Campbell writes from Chinju, Apr. 30, 1914,” *The Chronicle*, Aug. 1, 1914, pp.4–5; “Miss Scholes writes from Chinju, Jul. 31, 1914” *The Chronicle*, Nov. 2, 1914, pp.3–4; “Mrs. Watson writes from Tongyeng, Apr. 14, 1915” *The Chronicle*, Aug. 2, 1915, pp.4–5; “A Letter from Maymoury Suh to Essendon S. S., Fusanchin, Korea, Apr. 20, 1916,” *The Chronicle*, Aug 1, 1916, pp.3–4 など。

52）APMK は、教会に来る女子や婦人たちのための日曜学校、バイブル・ウーマンの養成のための聖書班・聖書学校なども開設したが、これらはここに含まない。

53）“Report of the Educational Committee,” *Extracts from the Records of the Australian Presbyterian Mission in Korea*, 1914.

54）Amy Francis “Is the Industrial Department Worth While?,” *The Missionary Chronicle*, Apr. 1, 1927, p.5.

55）“Striking Tribute to Missionaries, PWMU Annual Meeting,” *The Age*, May 10, 1934.

56）“Presbyterian Women in Conference, Desecration of the Sabbath,” *The Age*, May 7, 1936.

57）“Miss Niven writes from Fusan, Jul. 13, 1908,” *The Chronicle*, Oct. 1, 1908, p.3.

58）“Miss Moore writes from Simpyung, Korea（日付なし）,” *The Chronicle*, Jul. 1, 1909, p.2.

59）“Miss Davies writes from Chinju, Feb. 29, 1912,” *The Chronicle*, May 1, 1912, p.5.

60）拙著、2019 年を参照。